

欧米における「内視鏡看護研究」の現状

— 文献的考察を中心に —

三輪のり子¹⁾, 大橋達子²⁾, 岩城直子³⁾, 河相てる美²⁾, 滝原 香²⁾, 吉澤 環²⁾,
福井 則子²⁾, 石川今日子⁴⁾, 寺嶋順子⁵⁾, 山本美千代⁵⁾, 梅田加洋子⁶⁾,
堅田智香子⁷⁾, 高木妙子⁸⁾, 細川佳子⁹⁾, 山田真由美¹⁰⁾, 楠 早苗¹¹⁾,
若林理恵子¹⁾, 安田智美¹⁾, 泉野 潔¹⁾, 永山くに子¹⁾, 田中三千雄¹⁾

- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1) 富山医科薬科大学医学部看護学科 | 2) 同大学大学院医学系研究科看護学修士課程 |
| 3) 富山医科薬科大学付属病院 | 4) 富山赤十字病院 |
| 5) 富山市民病院 | 6) 高岡市民病院 |
| 7) 高岡医師会看護専門学校 | 8) 厚生連滑川病院 |
| 9) 富山県立中央病院 | 10) 済生会高岡病院 |
| 11) 真生会富山病院 | |

要 旨

本研究では、欧米における内視鏡看護研究の歩みと現状を明らかにすることを目的に文献的考察を行った。MEDLINE (1951～2003年)とCINAHL (1982～2003年)のOvidのWeb版(2004年5月7日現在)を使用し、Key wordを"Nursing and Endoscopy"とする全種類の文献のうち、看護系雑誌に掲載されていた109篇を対象に分析を行った。その結果、1966～1980年代までは解説が中心であったが、1990年代に入ると研究報告や症例報告もみられるようになり、文献数は増加傾向を示していた。しかし約50年間において、解説に準ずるものが全体の86%を占め、研究報告8.3%、症例報告4.6%であり、未だに内視鏡看護に関する研究が乏しい現状が明らかとなった。文献は活用目的により、『患者の安全・安楽への援助(48.7%)』『医学知識の習得(22.9%)』『看護業務の質の向上や円滑化(28.4%)』の3カテゴリーに大別された。1960年代後半は医学知識の習得のための報告が主であったが、1980年代中頃から患者の安全・安楽への援助に関するものが急増していた。さらに1990年代になると、再び医学知識の習得のための報告があり、看護業務の質の向上や円滑化を図るための報告も次第に定着してみられるようになっていた。これらは報告内容によりさらに12サブカテゴリーに分類された。とくに患者の成長段階・理解力・疾患や病期・心理面など患者の特性に視点を置いた看護の報告や、スタッフの教育や健康管理、関連部門や他職種との連携などの実践に繋がる報告が少なく、この方面への研究の蓄積が今後の課題として考えられた。

キーワード

内視鏡看護, 欧米, 文献分析

はじめに

臨床の各領域における内視鏡診療では、内視鏡技術の飛躍的な進歩に伴い、疾患の診断のみならず治療の分野にも内視鏡が着々と応用されるようになってきている。そのため現代では、より複雑で高度な患者管理が必要となり、専門性の高い看護が求められるようになった。

内視鏡を使って行われる検査や治療の場において、看護師は患者やその家族の目線に立って不安や苦痛を軽減し、安全かつ円滑な運営を図ることが求められており、患者に提供されるすべての看護業務は「内視鏡看護」と定義される¹⁾。既に欧米では、時代の要請を受けて、内視鏡看護に関する大規模な組織が発足し、専門的な知識や技術をもつ看護師の養成やガイドラインの作成が行われてきた。一方わが国では、1981年に消化器内視鏡技師制度が制定され、1988年に認定技師の情報交換とネットワークの構築を目的とした消化器内視鏡技師会が設立された。しかし、内視鏡看護を独自に検討する内視鏡看護委員会が設置されたのはごく最近のことであり、内視鏡看護のあり方をめぐって本格的に動き始めた途上にある。実際の臨床現場では、内視鏡看護の必要性に対する認識も、未だに十分とはいえないのが現状である。

そこで本研究では、わが国における今後の内視鏡看護研究の課題について示唆を得るため、先駆けとして、欧米における内視鏡看護研究の歩みと現状を明らかにすることを目的とした。

研究方法

検索誌は、Ovidの文献検索データベース Medical Literature On-Line (MEDLINE) および Cumulative Index to Nursing and Allied Health Literature (CINAHL) のWeb版を利用した。2004年5月7日現在の参照により、MEDLINEは1951～2003年、CINAHLは1982～2003年に収録されている全種類の文献のうち、欧米の看護系雑誌に掲載され、Key wordが「Nursing and Endoscopy」で抽出される文献を検索した。ここでの抽出条件は、MEDLINEは「title」「original

title」「abstract」「name of substance」「mesh subject heading」、CINAHLは「title」「cinahl subject headings」「abstract」「instrumentation」にkey wordを含む文献とした。このうち分析対象として、両検索誌で重複する文献および内視鏡看護に直接関係のない内容の文献を除く109篇を選定した。

分析方法は、掲載された看護系雑誌の種類ならびに刊行国別にみた文献数、文献の種類別にみた割合と動向、文献内容の内訳と推移、研究報告の概要について検討を行った。なお文献内容は、「title」「abstract」「mesh subject heading」または「cinahl subject headings」から判断し、類似の内容のものに分類して命名した後、それぞれの活用目的を視点において統合し区分した。

結果

1. 看護系雑誌の種類と刊行国別にみた文献数

内視鏡看護に関する文献が掲載されていた看護系雑誌は全35種類であり、多い順に『Gastroenterology Nursing』に49篇、『AORN Journal』『Krankenpflege』に各5篇、『SGA Journal』に4篇の報告がみられた。

雑誌の刊行国は11ヶ国にまたがり、多い順にアメリカ雑誌に75篇、次いでイギリス雑誌に9篇、ドイツ雑誌に8篇の報告がみられた(図1)。

2. 文献の種類別にみた割合と動向

文献の種類は、解説に準ずるものが多く、全体の86%を占めていた。この他、研究報告が8.3%、症例報告が4.6%であった(図2)。

文献数の動向をみると、初めての報告は1966年に遡るが、その後1972～1978年の間はしばらく途絶えていた。1979年以降は再び報告がみられ始め、1990年代に入ると増加傾向を示し、報告数は年に3～10篇の範囲で定着していた。文献の種類は、1980年代までは解説や総説が主流であったが、1990年代になると研究報告や症例報告も年に0～2篇の範囲でみられるようになっていた(図3)。

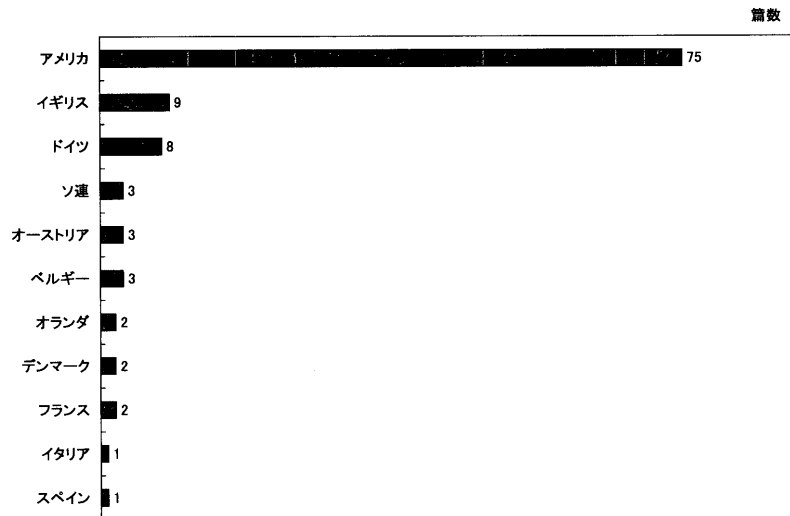


図1. 雑誌の刊行国別にみた文献数

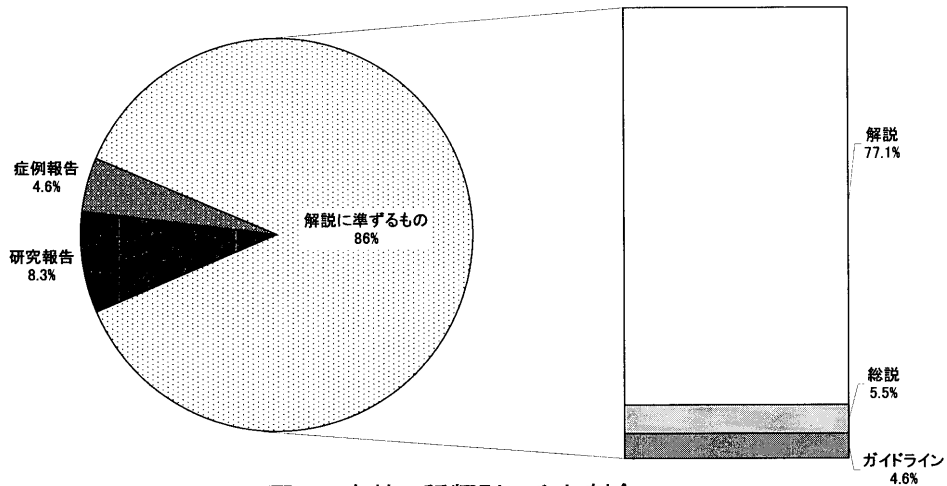


図2. 文献の種類別にみた割合

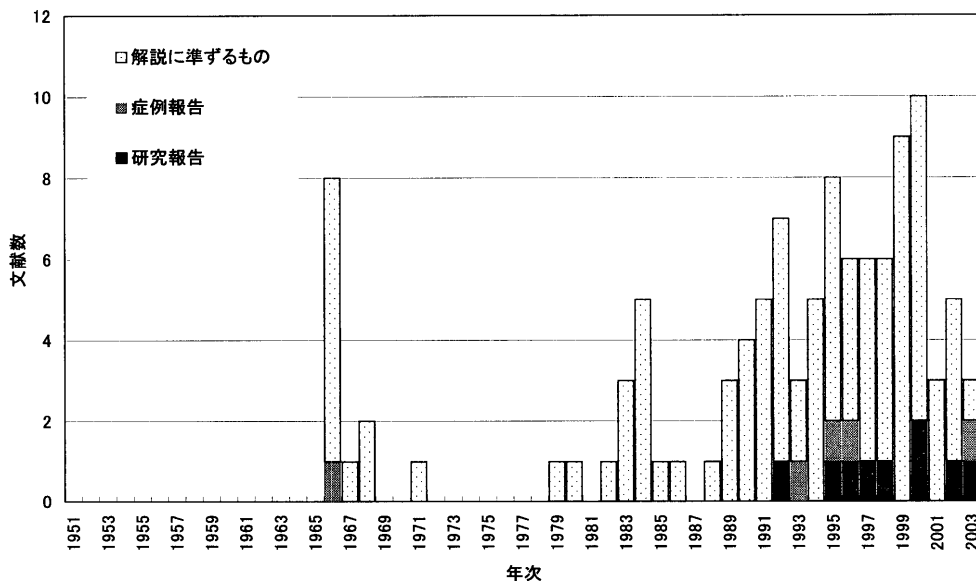


図3. 文献の種類別にみた動向

3. 文献内容の内訳と推移

文献の内容を検討したところ、表1に示したように12のサブカテゴリーに分類された。その大部分は、「内視鏡検査や治療における看護全般」であり、全体の44.1%を占めていた。次いで「内視鏡検査・治療・薬剤」の医学情報が24.8%、「内視鏡看護師としての専門性や役割」が11.0%であった。

これら12サブカテゴリーは、活用目的を視点において統合すると、『患者の安全・安楽への援助(48.7%)』『看護業務の質の向上や円滑化(22.9%)』『医学知識の習得(28.4%)』の3カテゴリーに区分された。それぞれについて文献数の年次推移をみると、報告の始まった1960年代後半は、医学知識の習得を目的としたものが中心であったが、1980年代中頃からは患者の安全・安楽への援助に関するものが急激に増加し、全体の大半を占めるようになっていた。1990年代～2003年には、医学知識の習得を図るものが再び報告されていたほか、看護業務の質の向上や円滑化に関する報告が次第に定着してみられるようになっていた(図4)。

4. 研究報告の概要

研究報告は全9篇あり(表1)、刊行国別にアメリカ雑誌に8篇、スペイン雑誌に1篇の報告がみられた。以下に、活用目的による分類ごとにこれらの概要を述べる。

『患者の安全・安楽への援助』のための研究は6篇²⁻⁷⁾であった。これらのうち「看護全般」に該当するものとして、とくに鎮静・麻酔剤を使用される患者への経皮酸素飽和度のモニタリングの

有効性や検査後の安全な退室に関わる要因を検討した報告があり、その後1997年にガイドライン^{8,9)}が作成されていた。このほか、検査や治療を受ける前の患者の不安を緩和するための音楽療法の効果を検討したものや、気管支鏡検査における看護介入を評価した報告などがみられた。また「感染予防」に関するものとして、アメリカ全体における内視鏡器具の消毒方法の実態調査が報告されていた。さらに「患者教育」に関するものとして、患者の学校教育レベル・単語認識力と教材の理解との関連について報告されていた。

『看護業務の質の向上や円滑化』のための研究は2篇^{10,11)}であった。これらは、「内視鏡看護師としての専門性や役割」について、アメリカの専門看護師17人の経験や実務から記述されたものや、「スタッフの健康管理」として、内視鏡機器の消毒に用いられるグルタルアルデヒドの身体曝露に関する調査の報告であった。

『医学知識の習得』のための研究は1篇¹²⁾であり、下部消化器内視鏡検査の前処置に用いられる腸管洗浄液について、その洗浄効果を風味の違いによって検討したものであった。

考 察

1. 欧米における内視鏡看護研究の歩みと現状

約50年間において内視鏡看護に関する報告は、アメリカで7割、ヨーロッパで3割であり、欧米のなかでも地域差がみられた。また、文献数や文献の種類の変移にも、時代の流れによって特徴的な動きがみられた。これらは、各々の地域や時代

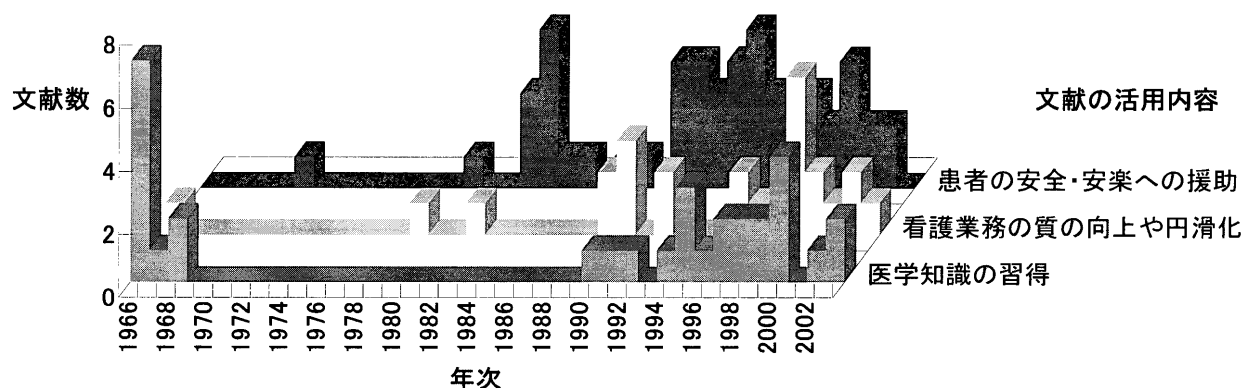


図4. 活用内容別にみた文献数の推移

表1. 内視鏡看護に関する文献内容の内訳

篇(%)

活用内容別カテゴリー	報告内容別サブカテゴリー	文献種類			全体
		研究報告	症例報告	解説に準ずるもの	
患者の安全・安楽への援助	内視鏡検査・治療における看護全般	5	2	42	48 (44.1)
	◎内視鏡検査や治療の種類に応じた看護	1	0	12	13
	◎業務内容・基準	0	1	10	11
	◎鎮静剤や麻酔剤投与時の看護	2	0	8	10
	◎患者の年齢・疾患に応じた看護	0	1	6	7
	◎患者の心理面に対する看護	1	0	1	2
	◎その他	0	0	5	5
	感染予防	1	0	3	4 (3.7)
	患者教育	1	0	0	1 (0.9)
看護業務の質の向上や円滑化	内視鏡看護師としての専門性や役割	1	0	11	12 (11.0)
	看護記録・アセスメントツール・情報管理	0	0	5	5 (4.6)
	検査室の看護体制・看護活動の導入	0	0	5	5 (4.6)
	スタッフ教育	0	0	1	1 (0.9)
	スタッフの健康管理	1	0	0	1 (0.9)
	関連部門や他職種との連携	0	0	1	1 (0.9)
医学知識の習得	内視鏡検査・治療・薬剤	1	3	23	27 (24.8)
	内視鏡検査・治療の発展	0	0	2	2 (1.8)
	内視鏡検査部門・設備	0	0	2	2 (1.8)
総数		9	5	95	109 (100)

における内視鏡看護への関心の程度や活動の現状を反映しており、その背景には欧米における内視鏡看護の組織的活動の影響があることが示唆された。そこで、欧米における組織的活動の歴史から内視鏡看護研究の歩みを振り返ってみたい。

アメリカでは、1974年に消化器病ナースを主体とした組織として、Society of Gastroenterology Nurses and Associates (SGNA) が発足している。SGNAには、アメリカにおける84地域のグループが登録しており、これまでに専門看護師の教育や研究活動ならびにガイドラインの作成が行われてきた¹³⁾。文献数の動向をみると、1970年代において報告が途絶えた期間がしばらくつづいたが、SGNAが発足した数年後から再燃している。これは、組織活動の成果によるものと示唆される。ただし、1980年代までの報告は解説に準ずるものを主流としており、この時期はまだ内視鏡看護を行ううえで必要な知識を身につける過程にあったことが推察される。

その後1990年になると、国際組織としてThe Society of International Gastroenterological Nurses and Endoscopy Associates (SIGNEA) が発足した。SIGNEAは、世界の内視鏡コ・メディカルによる情報交換、内視鏡看護の国際的基準の確立、専門看護師の教育ならびに研究支援を

目的としたものである。1998年に開催された第7回国際会議には、52ヶ国から420名の看護師が参加しており、内視鏡看護の認識は世界に広がりつつあることがうかがえる。さらに、1996年にはヨーロッパ内の組織としてThe European Society of Gastroenterology and Endoscopy Nurses and Associates (ESGENA) が発足した。これには、ヨーロッパの24ヶ国の看護師6,000名以上が登録している。

このようにして、欧米の内視鏡看護事情は、1990年代に大きな変革期を迎えており、それはこの時期からの文献数の急激な増加として表われている。また、篇数は少ないものの研究報告や症例報告もみられ始めていることから、近年において欧米ではようやく内視鏡看護を評価する段階にきたことが示唆される。

以上の現状をふまえると、21世紀においては、国際組織を中心としてさらに世界的に内視鏡看護のネットワークが広がり、各国で内視鏡看護が確立されることが期待される。また現段階において、内視鏡看護に関する研究は乏しく、あらゆる側面において課題は山積みとなっている。そのため科学的根拠にもとづく、より高度で、より安全で、より患者にやさしい看護を提供していくためには、今後さらに研究を蓄積していくことが求められる

であろう。

2. 今後の内視鏡看護研究の課題

これまでの内視鏡看護の進展状況を、活用内容別にみた文献数の推移と報告内容の傾向から検討し、今後求められる研究課題について言及したい。

『医学知識の習得』のための報告は、1960年代後半と1990年代以降に多くみられ、これらの時期は内視鏡装置の転換期にほぼ一致していた。内視鏡装置の転換期とは、すなわち消化器内視鏡装置に関していえば、古く胃カメラの時代から、1960年頃からのファイバースコープの時代、1980年中頃からの電子スコープの時代¹⁴⁾に該当する。内視鏡装置は、この半世紀の間に驚くほどのスピードで発展しており、それに伴い検査や治療方法も着実に進歩を遂げてきた。内視鏡検査や治療に携わる看護師には、このような刻々と変化する内視鏡医療に対応できるように、常に新しい医学知識を身につけることが要求されていることがわかる。現実には、内視鏡部門の看護師は内視鏡技師としての役割も担っていることが多いため、内視鏡の適用部位や基礎疾患に関する解剖生理学・病態生理学・病理学の知識を深めること、検査や治療の目的・方法・内容・偶発症を熟知しておくこと、さらには内視鏡に用いられる機器・処置具類の使用目的や取り扱いなどにも幅広く精通しておくことが必然とされる。看護師は、内視鏡検査や治療の過程において患者に最も身近に接する立場にあり、薬剤や検査・治療方法が患者に及ぼす影響をいち早く察知することが可能である。そこで、医学知識を習得したうえで患者のケアに携わることによって、質の高い医療を提供するためのさらなる課題や改善策を見出す一端を担うことが期待される。

次に『患者の安全・安楽への援助』のための報告は、とくに1980年代中頃より急激に増加していた。その内容は、検査や治療における身体・精神面における看護全般、感染予防、患者教育に関するものであった。これらは、看護師に求められる本来の役割にあたるため、この頃より内視鏡部門において「看護」の必要性に対する認識が高まってきたことが示唆される。しかしこれまでの報告内容をみると、検査や治療の種類の違いに焦点を

あてた看護が多く、それに比して患者のもつ特性の違いに着眼した看護は少ない傾向がある。現代において内視鏡は、あらゆる年齢層、様々な病期にある患者に適用されており、看護も患者の個性を配慮して提供されることが求められる。今後は、とくに患者の成長段階・理解力・疾患や病期・心理面などを考慮した内視鏡検査・治療における看護方法も考案していく必要がある。

最後に『看護業務の質の向上や円滑化』に関するものは、とくに1991年から増加しており、1998年以降は毎年報告されるようになっていた。患者に良い看護を提供するためには、患者のみならず看護の体制づくりやスタッフの健康管理にも留意することが重要である。このような認識は文献数の年次推移からみると、近年になってようやく定着されてきたものと示唆される。しかし報告内容は、内視鏡看護師の専門性や役割、看護体制の導入などの理念的な内容のものが多く、スタッフの教育や健康管理、他部門や他職種との連携など実践に繋がる内容のものは現状では少ない。内視鏡看護事情は国や施設によって異なるため、今後はさまざまな現場での実際を報告し、有効的な働きかけについて具体的に提示していくことも重要であろう。

結 論

過去約50年間にわたる内視鏡看護に関する文献109篇により、欧米における内視鏡看護研究の歩みと現状について検討を行ったところ、以下の知見が得られた。

1. 内視鏡看護に関する文献は、アメリカ雑誌に7割、ヨーロッパ系雑誌に3割の報告があり、欧米のなかでもアメリカにおける活動がより活発であった。
2. 内視鏡看護に関する報告は1966年より始まるが、1980年代までは解説に準ずるものを主流としており、欧米では内視鏡看護に関する知識を身につける過程にあった。1990年代から研究報告や症例報告が年に0～2篇の範囲で

みられ始め、ようやく内視鏡看護を評価する動きが現れていた。しかし約50年間において、解説が全体の86.0%を占め、研究報告は8.3%、症例報告は4.6%であり、研究報告は未だに乏しいのが現状であった。

3. 文献は活用内容により、『患者の安全・安楽への援助 (48.7%)』『看護業務の質の向上や円滑化 (22.9%)』『医学知識の習得 (28.4%)』の3カテゴリーに大別された。1960年代後半は、医学知識の習得のための報告が中心であったが、1980年代中頃から患者の安全・安楽への援助に関する報告が急増しており、内視鏡部門における「看護」への関心の高まりがみられた。1990年代～2003年には、看護業務の質の向上や円滑化のための報告も次第に定着しつつあった。
4. 今後の研究課題として、報告内容の少なかつた次の2点が考えられた。
 - 1) 患者の成長段階・理解力・疾患や病期・心理面などの患者の特性に着眼した安全・安楽への援助に関する研究。
 - 2) スタッフの教育や健康管理、他部門や他職種との連携など、看護業務の質の向上や円滑化に繋がる研究。

文 献

- 1) 堀内春美, 大橋達子: 消化器内視鏡看護. 田中三千雄 監, 日総研出版, 愛知, 2003.
- 2) Hinzmann CA, Budden PM, Olson J: Intravenous conscious sedation use in endoscopy: does monitoring of oxygen saturation influence timing of nursing interventions? *Gastroenterol Nurs* 15 (1): 6-13, 1992.
- 3) Lugay M, Otto G, Kong M, Mason DJ, Wilets I: Recovery time and safe discharge of endoscopy patients after conscious sedation. *Gastroenterol Nurs* 19(6): 194-200, 1996.
- 4) Diaz Rodriguez DR, Perez Hernandez MC, Martinez Piedrola MM, Delgado Sanchez MP, Sanchez Munoz M: Application of nursing methodology in an endoscopy unit (bronchoscopy). *Metas de Enferm* 5 (50): 50-54, 2002.
- 5) Salmore RG, Nelson JP: The effect of preprocedure teaching relaxation instruction, and music on anxiety as measured by blood pressures in an outpatient gastrointestinal endoscopy laboratory. *Gastroenterol Nurs* 23 (3): 102-110, 2000.
- 6) Baker K, McCullagh L: Comparison of actual and recommended ENT endoscope disinfection practices by geographical regions in the United States. *ORL - Head & Neck Nurs* 15 (4): 14-17, 1997.
- 7) Watkins GR: Patient comprehension of gastroenterology (GI) educational materials. *Gastroenterol Nurs* 18 (4): 123-127, 1995.
- 8) Anonymous: Guidelines for nursing care of the patient receiving sedation and analgesia in the gastrointestinal endoscopy setting. *Gastroenterol Nurs* 20 (2): S1-S6, 1997.
- 9) Society of Gastroenterology Nurses and Associates: SGNA guidelines for nursing care of the patient receiving sedation and analgesia in the gastrointestinal endoscopy setting. *Gastroenterol Nurs* 23 (3): 125-129, 2000.
- 10) Wright KB: A description of the gastroenterology nurse endoscopist role in the United States. *Gastroenterol Nurs* 23 (2): 78-82, 2000.
- 11) Ellett ML, Mikels CA, Fullhart JW: SGNA endoscopic disinfectant survey. *Gastroenterol Nurs* 21 (2): 64-72, 1998.
- 12) Hayes A, Buffum M, Fuller D: Bowel preparation comparison: flavored versus unflavored colyte. *Gastroenterol Nurs* 26 (3): 106-109, 2003.
- 13) Barnie DC: Twenty-five years revisited.

欧米における「内視鏡看護研究」の現状

- Gastroenterol Nurs 23 (1) : 10-14, 2000.
14) 田中三千雄：内視鏡の変遷. 消化器内視鏡
9 (11) : 1447-1458, 1997.

The history and present status of “researches on endoscopy nursing” in the West.

– A review of the literature –

Noriko MIWA¹⁾, Tatsuko OHHASHI²⁾, Naoko IWAKI³⁾, Terumi KAWAI²⁾,
Kaoru TAKIHARA²⁾, Tamaki YOSHIZAWA²⁾, Noriko FUKUI²⁾,
Kyoko ISHIKAWA⁴⁾, Junko TERASHIMA⁵⁾, Michiyo YAMAMOTO⁵⁾,
Kayoko UMEDA⁶⁾, Chikako KATADA⁷⁾, Taeko TAKAGI⁸⁾,
Yoshiko HOSOKAWA⁹⁾, Mayumi YAMADA¹⁰⁾, Sanae KUSUNOKI¹¹⁾,
Rieko WAKABAYASHI¹⁾, Tomomi YASUDA¹⁾, Kiyoshi IZUMINO¹⁾,
Kuniko NAGAYAMA¹⁾, and Michio TANAKA¹⁾

- 1) School of nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University
- 2) Master Course of Nursing, Toyama Medical and Pharmaceutical University
- 3) Toyama Medical and Pharmaceutical University Hospital
- 4) Toyama Red Cross Hospital
- 5) Toyama City Hospital
- 6) Takaoka City Hospital
- 7) Nurses' Training School of Takaoka Medical Association
- 8) Koseiren Namerikawa Hospital
- 9) Toyama Prefectural Central Hospital
- 10) Saiseikai Takaoka Hospital
- 11) Sinneikai Toyama Hospital

Abstract

The aim of the study was to show the historical development and present status of researches of endoscopy nursing in the West. We searched the Web version [Ovid Technologies] of MEDLINE from 1951 to 2003 and Cumulative Index to Nursing and Allied Health (CINAHL) from 1982 to 2003 using the following key words: nursing and endoscopy at accessed 2004, May 7. A total of 109 articles of nursing on endoscopy were identified. As a result, most articles were commentaries from 1966 to 1989. In the 1990s, research reports and case reports appeared, and the total number of articles increased. Of all articles, 86% were commentaries, 9.1% were research reports and 4.5% were case reports during past 50 years. Thus far, research reports on endoscopy nursing were still limited. These literatures were grouped into 3 categories based the purposes of practical use as follows; “Safe and comfortable aids for a patients (48.7%)”, “learning about gastroenterological endoscopy and bronchology (22.9%)”, and “Quality improvement and smooth promotion of nursing service (28.4%)”. In the second half of the 1960s, literatures related to “learning about gastroenterological endoscopy and bronchology” were main theme. In the middle of the 1980s, articles related

to “Safe and comfortable aids for a patients” increased rapidly. In the 1990s, articles related to “learning about gastroenterological endoscopy and bronchology” appeared again, and reports related to “Quality improvement and smooth promotion of nursing service” were established gradually. The contents of articles were grouped into 12 subcategories.

In future, it is needed to research in the field following two kinds of contents; 1) Nursing care service focused on the difference of characteristics of patients, such as growth stage, comprehension, condition of disease, and psychology. 2) Practical methods for staff education and health management, coordinating with related sections, cooperating with various special staffs.

Key words

endoscopy nursing, West, literature analysis